

趣 旨 文

◆歴史資料セッション「戦争関連資料の保存と継承―戦後 80 年に考える―」

歴史資料セッションでは、個々人の実体験と深く関係した「戦争関連資料」をいかに未来に伝え残していくのかを主題に二度にわたりセッションを企画してきました。

2023 年度には、「戦争関連資料の収集・保存・公開―国民の共有すべき歴史的文化遺産をどう残すのか―」をテーマとして、名古屋・金沢・前橋の三市を取り上げ、地域と結びついた博物館の「資料の収集保存公開」や「地域における資料の保存管理」の状況報告から、また自治体の「地域の歴史」を引き継ぐ「資料館建設」の活動から、「戦争関連資料」の継承と問題点を検討しました。

また、2024 年度は歴史資料のなかでも近年関心が高まりつつある「音」に着目しました。語り部による「証言」記録のみならず、当時の人々が直接耳にした時代を伝える音、音楽など、文字では表現しにくい時代を持つ雰囲気や情景、状況を直接伝える「音」の特殊性に鑑み、「音」の持つ史料価値について考察しました。

本セッションが特に重視してきた「戦争関連資料」は、個々人の実体験に深く関わる資料で、その残存形態も多様です。脳裏に書き込まれた記憶の語りであったり、日記や手紙などの私的な史料であったり、また写真・映像・絵画・音であったり、意志表現としての記念碑・慰霊碑などであったりします。こうした資料は、政府や関連機関が作成した文書が公の遺産として制度的に残されていくのとは異なり、その多くは個人的な所有物として歴史的価値も認識されないままに廃棄され、また単なる「もの」として歴史の流れのなかに埋もれてしまう運命にあります。しかし、歴史の実態を知るには公的な記録と、そこには記録されにくい人々の息づかいを記した記録とをあわせ見ることが不可欠であることは言うまでもありません。

こうしたことから、2025 年度は戦後 80 年を念頭に、時間的経過が齎す宿命的課題について検討を加えてみたいとおもいます。すなわち、ひとつはオーラルヒストリーが直面する戦争体験者の減少という今日的課題について。もう一つは個人の私的な思い出の「もの」と地域史の再構築の問題です。個人にとっての思い出の「もの」が潜在的にもつ歴史的価値を顕在化させることで、その時代や地域を理解する重要な手懸かりとなる歴史資料の重要性と歴史研究者の役割について考えてみる企画です。

報告者は、第一報告では長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館館長寺沢秀文氏および三沢亜紀事務局長から所蔵する関係資料の多くが同館の開館を契機に開拓団の関係者から寄贈され、以降、満蒙開拓団関係資料の収集拠点となっていた経緯や現状の活動、問題について報告いただきます。

第二は、愛知縣護國神社囑託の元杭和則氏から愛知県を事例に、戦争関連の記念碑や慰霊碑等の維持管理と遺族会関係資料の保存管理について現状と課題について報告いただきます。戦後 75 年を過ぎた頃から、遺族会を解散する自治体が増加し、遺族会関係資料の廃棄や散逸が全国的に常態化しました。これに伴い同会管理の戦争記念碑や戦争慰霊碑等の

維持に支障が生じている現状、遺族会資料と記念碑等の「もの」資料の保存と活用について報告いただきます。

第三は、東京都墨田区のすみだ郷土文化資料館学芸員石橋星志氏から東京二十三区における東京大空襲を主なテーマとした郷土資料や証言の収集と活用について報告いただきます。墨田区は区史が不十分な上、区民の移動が激しいという課題がある中で、公的な資料の活用や体験者などからの資料提供とそれらを組み合わせた活用方法について取り上げます。

報告後の討論では、それぞれ報告の資料収集と保存、活用と取り組みと歴史研究者の役割と位置づけについて、議論していきます。